

令和7年12月16日

秩父市議会議長 堀 口 義 正 様

総務委員長 浅 海 忠

総 務 委 員 会 行 政 視 察 報 告 書

1 期 日 令和7年10月21日（火）～23日（木）

2 視察先 北海道石狩市、北海道苫小牧市、北海道千歳市

3 参加者	委員長	浅 海 忠	副委員長	大 久 保 進
	委員	高 野 佳 男	委員	宮 川 浩 司
	委員	小 櫃 市 郎	オブザーバー	堀 口 義 正
	委員	金 崎 昌 之		(10月24日逝去)

4 視察目的

北海道石狩市 「ロープウェイ構想について」

○ 市の概要

札幌市の北側に隣接し、石狩湾に臨む水に恵まれた環境にあり、交通の要所であったことから、西蝦夷地の中心地として重要な役割を果たしてきた。昭和40年に入ってから札幌市のベッドタウンとして宅地化が進み、石狩湾新港の建設と工業団地の造成により、石狩湾新港をベースにした国際的な文化・経済の拠点として、めざましい発展を遂げている。また、雄大な自然景観や豊富な農水産資源を活かした観光政策等により、新たなまちづくりを進めている。総面積は722.33平方km、東西に28.88km、南北67.04kmに広がり、西側一帯は石狩湾に接している。人口は、令和7年9月末で約56,900人である。気候は、北海道の中でも温暖で四季の変化に富み、台風の影響も極めて少ない。対馬海流の影響による海洋性気候で、春から夏、秋にかけてはしのぎやすく、冬期間の気温も零下10度以下になることは少なく、気温格差もそれほどない。市名の「石狩」は、市を流れる石狩川からできた名前であり、先住民であるアイヌ民族の言葉で石狩川を指す「イシカラペツ」に由来している。その意味は「曲がりくねって流れる川」、「神様がつくった美しい川」と言われている。

○ 事業の概要

石狩市における地域公共交通は、事実上路線バスしか存在せず、軌道系交通の構想は従前より有するが事業採算性等から実現に至っていない。交通渋滞解消や積雪期の安定した移動手段確保が求められており、官民連携手法により市の負担軽減を図れる軌道系交通施設の導入可能性を調査した。「事業費・実現可能性・環境負荷・定時制・速達性」の観点から新交通モードを比較評価し、石狩市の状況を踏まえると「自走式ロープウェイ」の導入が最適であるとされた。自走式ロープウェイの導入を前提として、事業者の参画意欲、官民の役割分担、可能性のある官民連携の事業手法の確認を目的とするマーケットサウンディングを実施。市町村連携や支援の役割分担の可視化、都市開発事業の価値向上、交通の脱炭素化など前向きな意見を聴くことができたが、運営事業者は未定である。



北海道苫小牧市

「自動運転バス実証事業について、あなたの街でミーティングの取組について」

○ 市の概要

苫小牧市は、札幌市から約1時間、新千歳空港から約30分に位置し、面積は約561平方kmで東西39.9km、南北23.6kmに渡り、南が太平洋に面している。人口は約164,000人である。国際拠点港湾である苫小牧港を有し、多様な産業が集積している北海道を牽引する産業拠点都市である。海産物ではホッキ貝の漁獲量が日本一である。

○ 事業の概要

市内循環バス路線の将来像を見据え、需要の偏り、又は南北移動不便地域に対して交通手段を確保するため、「苫小牧市地域公共交通計画」で位置付けられた「新たなモビリティサービスの導入に関する調査研究」の一環として、将来的な実装化に向けた効果検証を行った。乗車は無料で、令和6年度冬季実証運行は、令和6年12月5日



から令和7年2月16日まで、計35日、105便、無事故かつ無運休で終えることができ、1,117名が乗車した。

自動運転バスの運行にあたり、①道路幅が広い（バスの車速が遅いため渋滞を招く）②地形が比較的平坦であること③気候（雪が少ない）④財源が確保出来るか（1台1億円+維持経費）などの課題を解決していかなければならない。



「あなたの街でミーティング」は、市長が各地区を訪れて、町内会や自治会の皆さんと地域の課題や要望等の意見をお聴きする懇談の場である。市民に知ってもらいたい情報を、市長が「テーマプレゼンテーション」で説明することにより、双方向の対話による形式となるよう取り組んでいる。相互の理解を深め、市政についての情報を市民と共有することが、

市民参加によるまちづくりを実現するためにも重要な取組である。

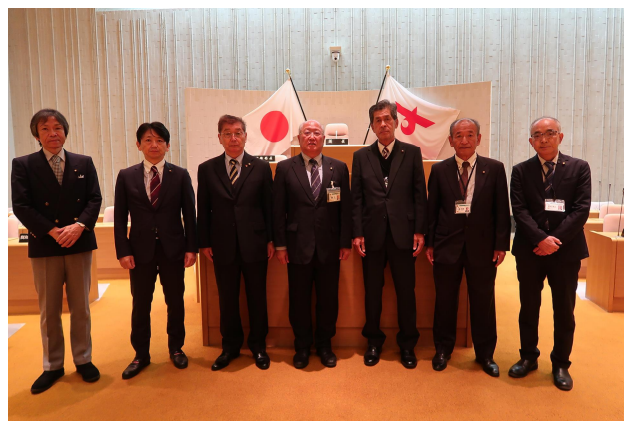
北海道千歳市 「千歳市シティセールス戦略プランについて」

○ 市の概要

石狩平野の南端に位置し札幌市や苫小牧市など4市4町に隣接している。面積は約594平方km、東西57.2km、南北30.4kmで人口は約97,000人で、北海道で一番若いまちである。市域の西部は支笏洞爺国立公園をはじめとする雄大な自然環境に囲まれている。中央部は平坦で市街地をはじめ、工業団地、空港、自衛隊駐屯地・基地などに利用され、東部は丘陵地帯で主に農業に活用されている。北海道の空の玄関口「新千歳空港」を核とし、「陸・海・空」の抜群のアクセスにより、道内の観光拠点となっている。自衛隊が市街地の三方を取り囲むよう配置されているほか、11か所の工業団地には多くの企業が立地している。

○ 事業の概要

千歳市では、『千歳市第7期総合計画』における施策の充実に加え、千歳市の数多くの資源や特性、強みを「千歳ならではの価値（千歳ブランド）」として積極的に市内外へと伝え、「選ばれるまち」を目指すことにより、交流人口の拡大、関係人口の創出、さらには定住人口の増加へ繋げるため、シティセールスを推進し



ており、推進のための体制づくりや、千歳ブランドの育成・発信を戦略的に行うため、『千歳市

シティセールス戦略プラン』を策定した。本プランでは、「市民がまちへの誇りを持つこと」や「千歳ファンを増やすこと」を目指し、「3つの戦略」を掲げ、発信力や推進力の強化を図ることとしている。



（「3つの戦略」概要）

- 1”千歳ブランド”育成戦略→資源、特性を知り、「愛着」や「誇り」を深める
- 2”千歳ブランド”発信戦略→”千歳ファン”の拡大
- 3”みんなでシティセールス”戦略→シティセールス意識の浸透とオール千歳での発信力向上

計画期間は、令和3年度から令和7年度の5か年である。

【 千歳市シティセールス戦略プラン 浅 海 忠 】

『千歳市第7期総合計画』において、「人をつなぐ世界をつなぐ 空のまち ちとせ」の将来像に向けた様々な施策を具体的に展開することとしている。数多くの資源や特性、強みを「千歳ならではの」の価値（千歳ブランド）」として、積極的に市内外へと伝える「情報発信の充実」をはかり「選ばれるまち」を目指すことにより、交流人口の拡大、関係人口の創出、さらには定住人口の増加へつなげるためシティセールスを推進する。

シティセールスは、「みんなで取り組むもの」と位置づけ、多様な手法の活用により、伝えたい情報や求められている情報をタイムリーに伝えることを基本とし、各分野での取組を強化・充実出来るよう、シティセールスを推進するための体制づくりや、千歳ブランドの育成・発信を戦略的に行うため『千歳市シティセールス戦略プラン』を策定した。

「情報発信・PR」→市民の「まちへの誇り」の醸成、市外の「千歳ファン」を拡大し、住環境や子育て環境等の「環境整備」→定住の促進、住みよさ、魅力の向上を図る。

シティセールスを効果的に推進するため「市の現状」を的確に把握し分析することにより、シティセールスの推進にあたっての課題やポイントを整理し、ターゲットの設定や発信手段等を検討した。

地域資源・特性等を検証、「アクセス」・「豊かな自然」・「風景」・「産業」・「日本有数の防衛施設」・「教育・スポーツ」・「人口動態」・「関係人口・交流人口」・「文化・歴史」をアンケートにより検証し、「強み・弱み・機会・脅威」に取りまとめた。秩父市も参考にしたい。

【 再エネ地産地活の取組 大 久 保 進 】

初日は石狩市にて、企業誘致・産業振興のほかスタートアップ的な業務についての取組を視察した。「石狩湾新港地域開発」は、北海道の流通拠点として発展していく。石狩湾新港地域は立地企業770社、就労人口は2万人を超える。札幌駅からも15キロと利便性が良い。石狩湾新港地域には多様な産業と再エネ電源が集積しておりオンデマンド交通や自動配送ロボットの実証フィールドにもなっている。この地域からの税収は市の税収の35%を占めている。再エネの地産地活へ地域の再エネデータをデータセンターに供給している。脱炭素化を先導する石狩市のデータセンター事業は総務省・経済産業省・環境省等の国策に基づくものであり、必要に応じて石狩市が全体を支援している。再エネの地産地活を目指すなかでロープウェイ構想があがってきた、市における公共交通は、事実上路線バスしか存在せず、軌道系交通の構想は従前よりあったが、事業採算性等から実現に至っていない。

苫小牧市では冬季自動運転バス実証運行について、概ね順調であったが積雪の多い地方であり除雪した雪を障害物と反応してしまう事があるのが一番の問題点である。実現に向けて実験を続けていく。千歳市のシティセールスは「みんなで取り組むもの」と位置づけターゲットにふさわしい多様な手法の活用により、伝えたい情報や求められている情報をタイムリーに伝えることを基本とし、各分野での取組を強化・充実できるよう、シティセールスを推進するための体制づくりや、千歳ブランドの育成・発信を戦略的に行うために「千歳市シティセールス戦略プラン」を策定した。

【 総務委員会行政視察を終えて 高野 佳男 】

今回の視察地である石狩市と苫小牧市では、新たな公共交通の整備計画について視察を実施した。石狩市では軌道系交通（自走式ロープウェイ）の建設計画について視察を行った。秩父市でも清野市長の公約に基づき、三峰ロープウェイ（2007（平成19）年廃止）の再建が検討されているが、石狩市が導入を検討しているシステムは、平坦な場所に通勤、通学、買い物等、市民の日常生活を支えるために敷設される構想であり、立地の条件や使用目的が大きく異なり、また観光を目的とする施設では補助金や交付金の対象にならないという点でも差があるので、当方に直接応用できそうな点は限られていた。しかし、技術的な側面とともに、実現の成否を左右するものとして採算制の確保が強調されていたことから、改めて三峰の場合も乗客の確保が最優先課題になるものと思われた。現在宝登山で運行中のロープウェイは三峰の最盛時であった1960年代半ばに匹敵する乗客数（35万人弱）があり、独立採算で黒字経営とのことなので、効果的な誘客の方策を検討していきたい。

苫小牧市では昨年度に実施された自動運転バスの実証運行等について視察を行った。本件では積雪への対処が大きな課題とされたが、同市関係部局の職員の尽力により、昨年12月～本年2月の事業では無事故、無運休で完了し、現在は事業化に向け完全自動のレベル4の達成が目標である。千歳市は空港が開設され、半導体のラピダスの新工場の建設が国家的な事業として進行中であるなど、今後の更なる躍進が期待される都市であるが、交流人口ひいては定住人口の増加を目指し、行政が「シティセールス」を通してまちの魅力の向上に努めている点に多々学ばされた。

【 総務委員会行政視察を終えて 宮川 浩司 】

今回の視察先は、石狩市、苫小牧市および千歳市であったが、以下にその概要を記述する。

石狩市では、企業誘致や産業振興策を主に伺ったが、特に多様な産業が集積する日本海側最大の工業地帯である石狩湾新港地域が印象に残る。巨大な地域をエネルギー供給拠点とし、再エネの集積、大規模データセンターを誘致するなど、積極的な産業支援を行なっている。また、公共交通は路線バスしか存在しないため安定した移動手段として自走式ロープウェイの導入を目指しているが、多角的な検討内容から、当局が住民の交通状況を相当切実な課題として捉えていると感じた。

苫小牧市では自動運転バス実証事業を実施しているが、地方業者に委託するもののノウハウは自前の積上げを大事にし市が主導しつつすべてを委託しない、と言い切る点に経営的発想が垣間見られる。冬季運行も試行錯誤されているが、市民全体に自動運転が理解されるような取組も進めている。市長が各地区を訪れて直接住民の意見を聞く「まちかどミーティング」では、様々な課題のなか、特に若年層の参加を促すような努力がされていた。若年層の取込は、秩父市に限らずどの地域でも深刻な問題となっていることが改めて理解された。

千歳市では、市のブランディングを進める取組である「シティー戦略プラン」が策定され、市町村魅力度ランキングでも上位にくるなど着実に効果が出てきている。戦略は詳細に組上げられ、全体戦略、育成戦略、発信戦略を連携循環させて相乗効果を上げる点が意識されており、市のブランディング化を真剣に追い求めている姿勢に感銘を受けた。

【 千歳市シティセールス戦略について 小 櫃 市 郎 】

シティセールス戦略プランについて行政視察を行った。背景、目的は、人口構造の変化、情報化の進展、新型コロナウイルス感染症の拡大、国際化の進展、地球環境の変動、国土強靱化の取組、価値観や生活様式の多様化、地方創生の推進など、我が国を取り巻く環境は大きく変化しており、そのような時代の潮流に的確に対応していくことが必要であり、そのため、千歳市では、『千歳市第7期総合計画』において、「人をつなぐ世界をつなぐそらのまちとせ」の将来都市像に向けた様々な施策を具体的に展開することとしている。これらの施策の充実を図ることに加え、千歳市の数多くの資源や特性、強みを“千歳ならではの”価値（千歳ブランド）として積極的に市内外へと伝える「情報発信の充実」を図り、「選ばれるまち」を目指すことにより、交流人口の拡大、関係人口の創出、さらには定住人口の増加へ繋げるため、シティセールスを推進している。

千歳市でのシティセールスは、「みんなで取り組むもの」と位置付け、ターゲットにふさわしい多様な手法の活用により、伝えたい情報や求められている情報をタイムリーに伝えることを基本とし、各分野での取組を強化・充実できるよう、シティセールスを推進するための体制づくりや、千歳ブランドの育成・発信を戦略的に行うため、『千歳市シティセールス戦略プラン』を策定している。このシティセールス戦略は、「選ばれるまち」を目指すために、観光連盟、商工会議所、工業クラブ、農協、航空会社等、オール千歳でまちの魅力を深掘している姿に感銘を受けた。

【 行政視察で学んだこと 堀 口 義 正 】

石狩市では、ロープウェイ構想についての経緯、今までの取組状況や今後の展望、課題など説明を受けたが、地域間を繋ぐ公共交通が脆弱化している状況下、再エネの地産地活を推進して企業誘致を進めている。その再エネを使いながら構築できないか？という観点から進めてきた。デマンドと交通は活用しているが、バスは運転手不足なので、無人化を考える中で「ロープウェイ構想」が浮上した、との事であった。事前環境や地域性、人口動態、予算規模など当市とは隔たりがあり、考え方は参考になったが、実効性には程遠く感じた。

千歳市では、シティーセールス戦略プランの取組について、コロナ禍以降、価値観や生活様式の多様化、地域創生の推進等国内外の環境の変化も生じてくる中、時代の潮流に的確な対応が急務となった、そのため、千歳市第7期総合計画において、「人をつなぐ、世界をつなぐ、空のまちとせ」の将来都市像は、様々な施策を具体的に展開することに由来する。

定住人口の増加に向けてまちへの誇りの醸成、交流人口の拡大・関係人口の創出を視点とし、3つの戦略によりシティーセールスを推進、千歳ならではの価値の育成と発信に取り組む①千歳ブランドの育成戦略、②千歳ブランド発信戦略、③推進力（体制づくり）強化戦略を掲げ、戦略ごとに細かな取組「発信手段の多様化、ふるさと納税等」を展開して効果を生んでいる。

苫小牧市では、自動運転バスの冬季実証運行など、モビリティサービスの導入や市民参加によるまちづくりについて視察した。今回の行政視察を通じて、地域の特色を活かした取組や事業展開など、当市にとって参考にすべきことが多くあった。